

DHARMA EYE



法眼

ご挨拶

宮下陽祐

曹洞宗宗務庁教化部長

南国から花の便りを聞く頃となりました。こちらの風の冷たさはまだ春遠しの感がありますが、梅の花は私たちに春を告げております。皆様におかれましてはご健勝のことと拝察いたします。

社会情勢が不穏に行き詰まりを見せている今日、我々はいったい何を考え生活していけばよいか解らない世の中になりかけているのではないのでしょうか？皆が我事ばかり考え、執着から離れられず、争いを呼び、混乱しています。人間が持つ徳を忘れてしまっているのではないのでしょうか？現在、政治も経済も、まるでゲームで熱狂するかのように徳がなくとも、その地位や財を保持することができ、それに夢中になっているような気がします。永平道元禪師曰く「往代は、古徳とも因果をあきらめたり。近世には晚進みな因果にまどへり。いまのよなりといふとも、菩提心いさぎよくして、仏法のために習学せんともがらは、古徳のごとく因果をあきらむべきなり。因なし、果なし、といふは、すなわちこれ外道なり。」と人間のあるべき姿を示されています。仏教は、普遍のものであり、ましてや、世界情勢や、国家によって、左右されるものではありません。み仏の教えには「自未得度先度他」における大乘菩薩の誓願があり、自よりも他を救うという道理（智慧）、これが慈悲の本質であるからです。

1人でも多くの方が仏のみ教えに触れる事ができ、我をなくし、他を思いやることのできるならば、心豊かな生活が出来るのではないのでしょうか？我が宗門はみ仏の教えを伝道する僧侶を育成すべく、日本国内は基より、国外においても、一昨年、昨年とフランス共和国で曹洞宗宗立専門僧堂を開単し、育成の土台が着実に整いつつあります。しかし、曹洞宗宗立専門僧堂を開単するためには、負担が多く各方面からのご協力

が、この宗立専門僧堂を継続し、これを支える力となります。

また曹洞宗宗制の整備も着実に進められており、曹洞宗伝道師及び伝道教師規程と曹洞宗僧侶教師分限規程の統一が成され、曹洞宗伝道師及び伝道教師規程、曹洞宗伝道教師研修所細則の廃案と曹洞宗国際布教規程の変更案も曹洞宗宗議会へ上申されました。

曹洞宗宗典經典翻訳事業においても正法眼蔵、伝光録、曹洞宗行持軌範の英訳も進んでおり、曹洞宗日課勤行聖典（Soto School Scriptures For Daily Services And Practice）に続いて出版いたしたいと思っております。

曹洞宗公式ホームページ曹洞禅ネット（<http://global.sotzen-net.or.jp>）では、観覧していただける多くの方のために、季刊誌「ゼンクォーターリー」「ゼンフレンズ」「カミノゼン」以上の企画を考えております。もちろん季刊誌のリメイクをしながら、新たな企画をし、曹洞宗国際センター、ハワイ国際布教総監部、北アメリカ国際布教総監部、南アメリカ国際布教総監部、ヨーロッパ国際布教総監部へお寄せいただいた各方面からのご意見等、情報の提供をしていきたいと思っております。

最後になりますが、大本山永平寺の福山諦法師の告諭の中に引かれた道元禪師のお言葉で「愛語は愛心よりおこる、愛心は慈心を種子とせり」とあります。慈愛の心からほとばしり出る親しみと思いやりのある言葉は、他人を歡喜させるだけではなく、肝に銘じ魂に銘じ、廻天の力さえも秘めている言葉です。私たちは他を自とし、まるで赤子を前にするように、優しい心を持ち共に生きていかなければなりません。徳ある行いは素直に讃え、徳至らぬときにこそ慈しみを忘れてはいけません。このような時代だからこそ、私たちは自己を明らかにし慈悲心を持って生きていかなければならないと思います。南無釈迦牟尼仏のみ教えが1人でも多くの方に灯されるよう祈念いたしまして挨拶とさせていただきます。

「菩薩行の坐禅」

相原昇明特派布教師

静岡県・成願寺住職

2008年11月2日午前10時15分

グリーンガルチファーム

今日こちらに寄せていただきました、日本から参りました相原昇明と申します。よろしくお願いたします。

はじめに子ども達のために、少しお話をさせていただきます。

とても暑い日、砂漠の中を私と友人が2人で歩いています。暑い、暑い、暑い。お水を飲みたい、そう思いました。私も、私の友達も両方ともお水をたくさん飲みたいと思っています。水がありました。こんな形（壺）の入れ物に入っている水がそこにありました。そしてそのそばに、別の形の壺の半分以上入るカップがありました。さあ、このお水をどのように分けたら、私と友達と喧嘩しないですむでしょうか。さあ、どう分けますか？子どもだけでなく、大人の方も考えて下さい。なぜなら大変難しい問題だからです。2人が喧嘩をしないように分ける、非常にいい方法があります。何か気付きましたか？例えばこの器（壺）が目盛りのあるカップだったら、多分同じ量を分けて飲むことができます。でも残念ながら目盛りがありません。そして、こちらのカップもやはり、目盛りがありません。分量を正確に量ることができないわけです。でも、とてもいい分け方があります。

私が、この器（壺）からこのカップへ、およそ半分だと思ふほどの水を入れます。そして、あなたが先に折んでください。私は半分ずつだと思って分けましたから、どちらを取られても怒るわけにはいきません。取ったあなたも、どちらが多いか正確には解からないでしょうが、自分で折んだのですから怒りません。そうすると、私とあなたで喧嘩は起きません。この答えはどうでしょう？極めて仏教的な答えだと思います。量的に平等ではないかもしれませんが、公平だといえます。

覚えておいてください。あなたとあなたの友達が何かを分

けあうときの分け合い方として、おもしろい考え方だと思います。これで子ども達へのお話を終わります。

皆さんは今日、ここへ坐禅をしに来られたと聞いております。どんな思いで坐禅をしたか、ちょっと私は勝手に想像しました。瞑想の時間として自分の心、気持ちを癒そうと思った方もいらっしゃるでしょう。あるいは、無心になって新たな自分を見つける、あるいは自分を取り戻すというふうに住禅をなさった方もいると思います。時には坐禅をすると特別な力が湧いて、人間以上の事ができるのではないかと感じて坐禅をしている方もあるかもしれません。と、いろいろでありましょうが、今日は坐禅を通じた法話、つまり仏教のお話をいたします。

日本に曹洞宗という坐禅を修行の中心とする宗派があります。その教えを中国から日本に伝えた、私ども曹洞宗の高祖と言われる、道元禅師様の書かれたご本に「正法眼蔵」という著作があります。その中に次のようなお話が載っています。

麻浴山宝徹禅師、あふぎをつかうちなみに、僧きたりて問ふ、
風性常住、無処不周なり、なにをもてかさらに和尚あふぎをつかふ」

宝徹禅師いはく、「なんぢただ風性常住をしれりとも、いまだところとしていたらずといふことなき道理をしらず」と。
僧いはく、「いかならんかこれ、無処不周底の道理」。
ときに、師、あふぎをつかふのみなり。
僧、礼拝す。

この短い話は、日本語でも800年近い前の言葉で書かれていますから、今の日本人でもなかなか理解が難しいところ。2つ、大事なことがこの話の中にあります。今、ここに風は吹いていません。でも、風は起きます。火はありません、でも蠟燭につけると火がつきます。水は見えませんが、こうして水としてこの（カップ）中にあります。この中に大地は見えませんが、外へ行って歩くと大地の上を踏みしめることとなります。東洋、とりわけ仏教、お釈迦様はこの世の中の要素を構成している要素を4つあげました。

「風」 動くもの、涼しいもの

「火」 燃えるもの、熱いもの

「水」 流れるものであり、冷たいもの

「地」 大地、命を作り出してくれるもの、暖かいもの

それらは私がいつも見ることができるわけではないものですが、この宇宙、自然の中にいつもある性質です。それらすべてを含んで「空」と言います。般若心経というお経の中に、「色即是空、空即是色」とでてくる「空」は今のことです。1つはまず、今申し上げたことです。

ここに風の性質は充ち満ちている。けれど感じられない。これ（扇）を使う事によって風は起きた、風は私に向かって吹いてきたということ、私は知ったり感じたりすることがはじめてできます。見えるもの、見えないもの、感じるもの、感じないもの、そのことを、例えばこれ（扇）を使う姿が目に見えて、風が起きたということを感じますが、そうではなく風が起きることもある、ということも、もちろん覚えておかなければなりません。

2つ目は、次のことです。お釈迦様はこの世の真理を「縁起」の法として覚りました。私がここにある、今ここにある、このことも含めて、必ず何かものごとが起きる事情がそこにあるという時には原因があるはず。そして原因と現在の出来事を結ぶものや、状況を縁といいます。この世に風の性質は満ちている、ということが原因です。宝徹禅師のように扇を使うことが縁です。私が涼しくて気持ちがいい、と感じます。これが結果です。皆さんは坐禅をなさいました。坐禅をしている間はとても気持ちがいいと思います。でも坐禅を止めるといつもの自分に返ってしまいます。だから、坐禅をし続ける、つまり扇をずっとこうしている（扇ぎつづけている）と、ずっと涼しいのです。その縁ということを日常的な生活に近いことでちょっとお話をいたします。

ちょっと皆さん、自分自身の爪を見ていただけますか。爪が伸びますか？皆さん伸びますよね、いいですね？もし、ケガをしたり痛めていて伸びないという方がいたら謝ります。皆さん伸びますね。それでは、自分のもの、そして身体の末端のものですから、自分で爪に命令をして下さい。伸びるの止まれ。そうして爪が伸びるのを止めることができる人はちょっと手を挙げてください。いませんか？爪は伸びる、爪が伸びるのを止めることはできない。そのことに異論はありませんね？爪が伸びたらどうしますか？そう、爪が伸びたら切ります。爪が伸びること、伸びるのを止めることができない

ことはこの世の真理です。伸びたら切るというのは、人間の知恵です。当たり前ですね。もちろんこれは喩えです。

仏教で「諸行無常」という言葉があります。爪が伸びるということは諸行無常だからです。お釈迦さまはこの世にある全ての存在をいのちの現れとみました。人間や動物も、そして草や木も、そして山の姿や川の流れも、いのちの現れとみました。だからそのすべてのいのちは変化をし続けているということです。そして爪が伸びるのを止めることはできないという答えをもらいましたが、このことを「諸法無我」といいます。目に映るすべての変化をし続けている命は、その変化が私の思い通りに変化をしないということです。思い当たることはありませんか？爪が伸びたら切る、ということは「涅槃寂静」という言葉にあたります。爪や髪の毛や身体の汚れなどは、目に見えますから切ったり洗ったりすることができます。しかし、こころとか思いというものはどうでしょうか？たとえば、あなたとあなた以外の誰かが向かい合った時に、相手が親であれ子どもであれ友人であれ、相手が私の思い通りに変化をしてくれたいでしょうか？思い通りにならなかったことの方が多いんではありませんか？思い通りにならない時に、私は相手のこころを欲しくなったり、私が怒りを持ったり、愚かな思い、愚痴をブツブツと言ってみたりすることがありました。あなたはいかがですか？爪は切ることで整えることができます。今のような思いをどうしたら整えることができるでしょうか？これを整える、つまり涅槃寂静の思いに入っていくということが、仏教徒の一番の願いであります。大変に難しいことではありますが、みなさんはすでに一つの素晴らしいことに出会っています。それが坐禅です。

また、お釈迦さまの教えは少し違った角度から見ると、自覚と慈悲の宗教といわれます。自覚をするということは、この世の真理、見えるものも見えないものも、学ぶことができることも学べないことも、あるかないかということも、解かることも解らないこともすべて含めて、縁を知るということです。そのすべての縁を学んだり知ったりするということは不可能に近いだろうと思います。でも、少なくとも私のいのち、自分自身のいのちの縁ということについては、自覚ができるのではないかと思います。もちろん、あなたも、あなたも、あなたも、あなたも、です。ただ、私もなかなか自分の命の縁、つまり、なぜここにあるのか、どのようにしてあるのか、どうあったらいいのか、ということが解りません

でした。今から18年程前のちょっとした出来事で私はそれを少し自覚することができました。1965年生まれの私よりずっと若い和尚さんと出会いました。ある勉強会で彼の20分程の話を聞きました。そのすべては覚えてはいませんが、これから申し上げる部分だけは私の胸の中に残りました。彼は日本の中でも西の方、九州という地方の北部、小倉という町の出身でした。当時、25～6歳だったと思います。彼の話は次のようなものでした。

「1945年8月9日、1機の爆撃機が南方海上から日本へやって来ました。目指したのは九州の小倉でした。しかし、その日、小倉の上空は雲が覆っていました。そのため、その飛行機は爆撃地点が判らず、機首を左、つまり西に向けて飛んでいきました。しばらく飛行した後、第2の目標地点と定めた街が眼下に見えてきました。その街も雲が少しかかっていたのですが、帰りの燃料のこともあって、その街に人類史上2つ目といわれた新型爆弾、原子爆弾を投下してその飛行機は去りました。その街が港町、長崎でした。長崎は本当は第1の目標地点ではなく、第2のターゲットだったそうです。」

その若い和尚さんはこう言いました。

「この事実を戦後アメリカから出された資料で知りました。人生や歴史に、もしとか、何々だったらということはない、それは若い私も知っています。でも考えてしまいました。もしあの日、小倉の上空が晴れていたら、あの爆撃機は長崎ではなく小倉に原子爆弾を落としたに違いありません。そうすると、当時市内中心の小学校に通っていた私の母は被災をしたでしょう。長崎の被災の状況からして、多分私の母は亡くなっていたに違いありません。母がいないということ、それは私が生まれなかったということです。」

彼はこう続けました。

「そう考えてみたら、長崎に落とされた原爆は他人事ではなかった。広島に落とされた原爆も他人事ではなかった。そして、私が生まれる20年前に終わった戦争、第二次世界大戦は、私と無縁でないことに気付きました。」

私は今日、今の話で原爆投下の是非を語ろうと思っているわけではありません。ただ人類にとって不幸だったマイナスの原因ということも、私の命に関わりがあるということがあ、ということをおわかりいただきたかったです。そうで

す、私にとって私の命は、私が知ることのできるものもあれば、今の話のように見ることも知ることできない中で、繋がってきた命ではないかと思います。遠い遠い昔から、ずっと繋がってきたいのちです。私ばかりでなく、あなたも、あなたも、あなたも、あなたも、同じです。この縁があって今ここに私がいる。あなたがいる。その縁によってある命をあなたはどのように使いますか？貪りや瞋りや愚痴のある生活にまかせるのか、それとも爪を切るように調った生活を目指していくのか、さあどちらでしょう？私は私のいのちが喜ぶようなお釈迦さまの道を歩いていきたいと自覚しています。その中心が坐禅であると確信をしています。しかし、坐禅はただ組むだけでは、時に意味のない場合があります。申し上げたように、多くの縁によって今ここにありのちをどう使うか、ということを考えていただきたいのです。そのメッセージを皆さんにお伝えしたいと思います。

「^{あいじ}愛語は愛心よりおこる、^{しゅうじ}愛心は慈心を種子とせり」

人を生かし、人を仏道に導く言葉が愛語です。愛語は人を愛することにはじまります。人を愛するとは、無限の縁の中で支え支えられているお互いを自覚し、慈しみあう心を根本とします。

現代ほど言葉の乱れた時代があったでしょうか。

粗雑な言葉は世の乱れを生み、愛心なく慈心のない生命を軽視した社会に拍車をかけます。

言葉は思いのあらわれであり、単なる言語や伝達手段ではありません。自らの人格を宿し、自らの人格をつくるのです。一語一語を大切にしなければなりません。

現実に、家庭も国際社会も言葉で動いているのです。好ましい関係は好ましい言葉によって結ばれます。^{あかこ}赤子を前にして限りなく優しくなれるその心で、共に語り合ひましょう。徳ある行いは素直に讃え、徳至らぬときにこそ慈しみを忘れてはなりません。

曹洞宗が掲げるスローガン「人権・平和・環境」の実現は、毎日の生活からかけ離れたところにあるではありません。愛語の実践が、柔らかかにして他を思いやる自己を育て、ひいては人権を尊重し、平和を願い、環境に思いがいたる人を育

むのです。

お釈迦さまの教えを受け継ぎ、正しい信仰に生きる私たちの愛語の実践が、慈しみあふれる社会を築く第一歩なのです。

にちにち
日々、愛語を心がけてまいりましょう。

南無釈迦牟尼仏

曹洞宗の管長様からのメッセージです。この言葉のひとつひとつを説明する時間はありませんが、私どもが坐禅をするその意味として、今の言葉をよくよくご理解いただきたいと思います。生き方として、縁あってある私の命を、私以外のものに向けて何か関わりを持つということです。それが、慈悲と言うことです。言葉を使う場合にも、誠の愛情ある言葉、そして、相手の価値観が大きく変わるほどの言葉を心から発しなさい、ということです。それが、お釈迦様に近づく道を歩む者、つまり菩薩様の生き方です。もちろん、その根本は坐禅です。しかし、最初にも話した通り、坐禅をしている間だけ気持ちがいいというのでは、あまり意味がありません。それは止めてしまうということと同じです。でも24時間毎日坐禅の生活をするとするのは大変難しくもあります。またできません。でも、坐禅の生活はできます。道元禅師様の言葉の中に、次のような坐禅に対する言葉があります。

「正身端坐して左に側右に傾き、前に躬り後に仰ぐことを得ざれ」であります。あなたにとって苦手なことや、苦手な人、遭いたくないことなどが来ると、あなたは逃げませんか？ちょっと姿のいい人や、好きな人や、いいこと、ちょっと上手い話などがあると、寄っていきませんか？悲しいとき、切ないときにこう（前屈みに）なりますよね。ちょっといいことがあったり、成功したりすると、こうなって（後ろに仰げ反る）、更にこうなりませんか（鼻を高くする）？いかがですか？そうですね。それをしないということです。それが坐禅の生活です。そうすると坐っているその時だけでなく、人生そのものが、生きるということが坐禅の生活になります。大変難しいことです。でも折角ですから、みなさんの坐禅が、私の命を私の命以外のものに向ける坐禅であって欲しいと願っています。そうすると、曹洞宗のスローガンである、「人権・平和・環境」の問題にも坐禅が関わりを持つことになります。どうか皆さんの爪が綺麗にいつも切り揃えられているようないのちであるよう願っています。みなさんが調ったいのちで

あるように願っています。お釈迦様に近づくことができるよう願っています。

以上で今日の法話を終了させていただきます。

基調講演 仏教東漸 - アメリカ生活における仏教（二）

ダンカン・隆賢・ウィリアムズ

カリフォルニア大学パークレイ校 准教授（日本仏教）
日本研究センター 所長

（承前）著名なベトナム人仏教指導者であるティク・ナット・ハン師は、仏教倫理（＝戒律）のことを「北極星」のようなものと語っています。ご存知のように、米国に奴隷制があった時代には、自由をめざして北へと向かったアフリカ系アメリカ人の奴隷たちは、自由そして解放の地へと自分たちを導く助けとして夜になると北極星を利用しました。ティク・ナット・ハン師は倫理について考えるために、この北極星という喩えを使うべきだということ、つまり殺さない・うそをつかない...といった原則を道しるべ、あるいは私たちが歩いていくべき方向を示す指針として使うようにと説いています。その導きの助けによって私たちは自由へと到達することができるからです。しかし実際には、私たちは北極星それ自体に到達するわけではありません。それは何故でしょう？そこには酸素がないからです。つまり、ここで大事なことは北極星に到達することではないのです。大事なものは正しく北へと向かうことです。ですから、仏教は私たちに北へ向かって、自由に向かって、進むようにと促します。途中で道から外れることがあるかもしれませんが、しかし、それでもなお北へと向かうとどこまでも努力します。その方向に向かって進むようお互いに助け合うこと、それこそが仏教徒としての務めなのです。

つまり、すべての戒律の根底にある基本理念は、「苦しみなくなる」という理念なのです。もし苦しみ私たちが仏教徒にとっての難題であるとするなら、その苦しみの軽減ということもまた私たちのプロジェクトなのです。倫理について

の議論、そして環境についての議論に対して、私たち仏教徒がもう一つ重要な貢献をすることができるのはこの点に関してなのです。「殺さない」と私たちが言うとき、それは他の人間を殺さないということを意味しているだけではありません。インド仏教の伝統では、倫理はすべての衆生、すなわち動物・植物・全生態系にまで拡張されて理解されています。ですから、私たちの責任はお互い人間同士のことだけにとどまるものではありません。私たちの倫理的責任は、「惑星地球」と呼ばれる相互に結びついた「宝珠」にいっしょに住む私たちすべてに関わっているのです。それはすべてのものにとって共通の問題です。そこまで倫理の観念を拡張するならば、「殺さない」という戒律一つを取り上げてみてもわかるように、戒律を厳密な意味合いで守ることは極めて困難になります。

台湾のような仏教国においては、肉食主義を実践している仏教徒の集団が数多く存在していますし、日本の仏教においても肉食主義の伝統があります。永平寺や總持寺においては、「精進料理」が施されています。そのような意味において、「他の命を奪わない」という考えは常に仏教伝統の一部をなしていました。しかし、道元禅師や他の人々はこの問題に関して私たちをさらに先へと押し進めさせます。道元禅師は「では、草木成仏というのはどうだ？」と問います。つまり、草や木もまた仏性の一部であり、私たちが生きている倫理的世界の一部だということです。山や河、草や木、それらは私たちの世界の一部であり、責任の一部なのです。ですから、たとえ肉食主義者であっても、依然として何かを殺しているのです。命を奪っているのです。いいですか？ではどうやってそれをしているのでしょうか？インドのジャイナ教徒は、「殺さない」という原則をさらに推し進めていることで有名です。彼らは虫を踏み潰さないように特別な歩き方をしますし、水を飲むときにも虫を飲み込まないようにフィルターを使います。ジャイナ教の伝統において、実際にそういうことまでしている人は非常に稀ですが、物を食べず餓死することを選んだ人々は偉大な師とされ伝統における手本とされました。彼らはまず肉食主義者となり、木から落ちたものだけを食べるようになり、完全にナマの食べ物だけを食べて、最後には自己消滅へといたります。なぜでしょうか？彼らは仏教徒と同じく、苦しみという考え、この世には苦しみがあるという考えをとっているからです。そして、彼らもまた苦しみを軽減したいと望みました。そのための最善の方法は、単純に

言えばこの世から消滅することだと考えたのです。つまり、私たちは生きていることによって苦しみを引き起こすと考えました。その通りではありませんか？私たちは何かを食べて生きているからこそ、他の人に馬鹿なことを言い、そのために他の人を苦しめます。私たちは間違ったことをしでかし、家族の中でたえず過ちを犯して両親や子供たち、兄弟を不幸にさせます。私たちの存在自体が苦しみに関わり、たえず苦しみを引き起こしています。こういうわけで、この問題に対するジャイナ教の解決策は自己消滅、自己絶滅でした。

しかし、釈尊が言わんとしたことは、ご存知のように、そういう極端なところまでいってはいけないということでした。彼は常に「中道」を説いたからです。つまり、「もし例えそれを実現して自らを消滅させて、それで自由を得た、解放されたと思ったとしても、やはり何者かを、すなわち自分自身を殺しているのではないか。それはある種の自殺に他ならない」ということなのです。釈尊は自殺を勧めてはいません。彼はまた他の人を侵害し、苦しめるような方法で「わがまま勝手にふるまうこと」も勧めてはいません。中道を勧め、存在することによって苦しみの世界に生き、苦しみを引き起こし、苦しみを受けなければならないこと。そして、仏教の考えは、自己消滅によってではなく、その苦しみを軽減することだとはっきりと知ることだと説いたのです。ですから、私たちは生き抜いて、これらすべての倫理的原則を守る方法を見出さなければなりません。しかも、北極星の喩えのように、道を正しく見据えて、戒律を絶対的で不変なものと考えて、そこに停滞することのないような仕方でおこなわなければなりません。戒律とは自由、解脱へと向かって正しく進むことを助け、倫理的な道とはどのようなものなのかについての理解を得るための道しるべのようなものです。こういう態度が、私たちが個人として直面するすべてのものについてだけでなく、より大きな社会的問題、より大きな環境問題について考える際にも、多いに助けとなると私は思っています。

現代の消費社会からいきなり石器時代に帰ること（環境保護主義者の中にはそうすべきだという人たちもいますが）はまず不可能でしょう。私たちは方法 例えばトヨタのプリウスだとか、日本製の環境にやさしい冷蔵庫などを見つけないければなりません。私はそういう製品はいいものだと思います。それはポジティブな一歩です。車を運転するより運転し

ない方がいいのでしょうか？確かにそうかもしれません。しかし、もし車を使うのなら、石油をなるべく使わないような、石油になるべく依存しないような新しい方法を見つけるような方法を探しましょう。もし、冷蔵庫のなかった時代と今のような時代とを比べてどちらの便利さを選ぶかということになれば、私たちはおそらく冷蔵庫のある生活の方をとるでしょう。しかし、私たちは経済や政策立案者たちを動かして、消費者だけではなく製造業者にも環境にもやさしく、環境への影響の少ない、洗濯機や冷蔵庫を使うよう奨励させるようにできないものなのでしょうか？私はそれはいい考えだと思います。こういったことを仏教徒は主張するべきではないでしょうか。「私たちはどの戒律も守ることができない。倫理的な生き方をすることができない。だから勝手気ままな生活を送って、お金を使い、なるべくたくさんのものを買えばいい。それで他の人たちの生活や環境が破壊されたとしても、それがいったいどうだっていうのだ」というのは仏教徒の立場ではありません。そういう考え方を私たちは拒否しなければなりません。かといって、完璧な生活を送ることはできないこと、苦しみをまったく引き起こさず生きることなど不可能だということはいくつかわかっています。人間がテクノロジーを発達させる以前、市場や消費文化を発達させる以前の時代についての極めて理想主義的な考えを予想していたかもしれませんが。環境保護運動のなかには、そういったもっと簡素だった時代に回帰するべきだと唱える人たちがいます。仏教徒なら、なるほどそういう見解はすばらしいし、考えとしてはその方向性もすばらしいけれども、そのような完璧で理想主義的な世界に住むことはできないこと、つねに選択や決定を迫られ、ときには最善の選択をするよう強いられることがあることも知っています。時には、二つのたいしてよくない選択肢のどちらかを選ばなければならない時もあります。しかし、ここが仏教のもう一つのすばらしいところだと思います。つまり、仏教は現実主義的な宗教です。リアリズムの宗教なのです。物事がどうあって欲しいかということではなく、実際にどうなのか、それをどう受け取り、前へと進んで生きていくかということが問題なのです。それをどうやって実現していくかということについて考える上で、助けになるすばらしい教えが仏教にはあります。

さて、仏教の伝統における三番目のそして最後の宝物、つまりサンガ（僧伽）へと話題を移しましょう。初期の仏典のなかでは僧伽についての狭義の考え方として、僧伽は僧、僧

尼、在家の男子、在家の女子という四つのグループからなるとされているということをお話ししたいと思います。彼らにとって仏陀は幻影であり、ダルマは教えでありその教えを日常生活へと具体化すること、そしてサンガは私たちがそれをおこなうことを援助する共同体を意味しています。サンガはまた、広い意味においては、自分たちがその一部として織り込まれているような、自分という個々の宝珠が他のすべての宝珠を映し、また他のすべての宝珠によって映されているような、大きな生命的共同体のことだと私は考えます。それが私たちのサンガなのです。仏教は、何か将来に向かって提供する良いものを持っているだけではなく、サンガという共同体、環境運動にすでになんらかの影響を与えているサンガという共同的生活と生活スタイルを形成することにももうすでに深く関わっているのです。と言うのは、環境運動に関わっている非常に多くの人たちが、仏教を単なる考えのすばらしい源と見なしているだけではなく、行動の源としても考えています。つまり、新しい人間 - 自然 - 社会をいかに構想するかというときの源としてだけではなく、自分自身の生活において環境保護主義者として、仏教をどのように活かしていくかを考えるときの源として、です。例えば、多くの社会運動と同じように、環境運動においてもある場所を汚染している会社に腹を立てたり、憤慨したり、むかついたりすることは簡単です。また、そういった問題に関心を向けない政府に反感を持つことも簡単です。憤慨することは簡単にできますから、世間で活動している環境運動家のような人々の中には怒りを動機にしている人々、行動の動機が怒りであるような人々もいます。私たちが何度も学んできたことは、怒りによっては活動や運動を継続できないことです。それでは、怒りが静まると動機を失ってしまうからです。ですから、また怒りを感じるためには、なにか人工的な方法を講じなくてはなりません。それは自分自身にとってもためにならないことですし、組織や共同体や活動にとってもそれは破壊的なことです。人々は、内的、外的環境にいかに対処すればいいのかという方法、世界に関与する正しい態度とはどのようなものなのか、を求めて仏教に眼を向けているのだと私は思います。様々な立場の環境運動家たちがいます。米国において“ディープエコロジー”と呼ばれる運動の創始者ビル・デュヴァルのような人々、熱帯雨林アクションネットワークの創始者ジョン・シードのような人々、熱帯雨林アクションネットワークの創設を助け、また核廃棄物について考える運動の創始者ジョアンナ・メイシーのような人々、ナショナル・リソ

ース・ディフェンス・カウンシル（最大の環境法グループ）の会長であり、シエラ・クラブ元会長であるジム・トンプソンのような人々は、実はみんな仏教徒なのです。仏教の伝統に価値あるものを見出した多くの人たちがこれらの運動に関わっているのです。個人としてだけでなくサンガという形態においても、です。

ここアメリカだけでなくアジアにおいてもその実例があります。もっとも力強い実例は、皆さんもご存知のように、ミャンマーにおいて多くの僧たちが威厳に満ちた静かなやり方で振る舞い、不正義に対する証言をおこないました。ミャンマーにおいては、政治的体制の抑圧がいかに過酷であっても、人々は仏教僧侶を道徳的力の源として頼りにしてきました。仏教僧侶は新しい政党を作ろうとしたのではありません。静かで威厳あるやり方で、お寺や托鉢をおこなう道で、人権を犯している政治体制派の人々に向かって鉢を伏せたのです。それは「あなたたちが人々への対応を変えないうちは、私たちはあなたたちがしていることへの社会的拘束力をあたえない」と言ったのです。静かで威厳ある方法で彼らは大きな貢献をしてきたのです。東南アジアの他の場所でも同じような運動がありました。タイの北東部での「エコロジー僧」と呼ばれる人たちのたいへん感動的な話があります。恥ずかしい話ですが、私たち日本の多国籍企業がサラワクとタイで支持できない方法で熱帯雨林の木の伐採をおこないました。これはまったく木を伐らないようにするという問題ではありません。（私たちに紙も木製製品も必要です）支持を得られる方法で木を伐る、つまり子供たちや孫たちの、未来の世代のために森を残すようなやりかたでそれをおこなうという方法があるはずですが、もし木をすべて切り倒してしまうようなやりかたをするなら、もはや回復が不可能になり森を完全に破壊してしまいます。それがこの日本の一部の会社が東南アジアでやっていることなのです。タイでは一部の僧侶がいっしょになって「ここは私たちの家だ」と主張しました。彼らは「フォレストモンク（森林僧）」と呼ばれる人たちで、文字通り森林は彼らの家だったのです。彼らは町や寺院には住まず、森林の中で修行をします。そこで何年もの瞑想修行をおこなうのです。彼らは訪問者を受け入れ援助をおこないます。彼らは森に住み、非常に深い瞑想を修行する人々です。地域の環境についてよく知っていて、どの薬草が人を癒すのに役立つかもよく心得ています。近隣の村から人々が彼らのもとにやってきました。彼らは森と非常に密接につな

がっていますから、森がなくなることは彼らにとっては死活問題であるだけでなく、仏教そのものの存続にとっても脅威なのです。都市では彼らのような仏教を実践することはできません。仏陀自身も森の中で修行をしました。仏陀は菩提樹のもとで悟りを得ました。そういうわけで、すべての寺には「山号」があるのです。仏教を修行する寺が自然の中になければならないことがあります。だから中国、日本、韓国ではお寺の名前だけではなくいわゆる「山号」というものがあるのです。それは、仏教を自然という背景において、ある特定の方法で修行することができる場所という意味なのです。これらの森林僧は自分たちの住処が破壊されることを心配しただけではなく、タイの自然環境が破壊されてしまうことを案じたのです。彼らは森を歩き回って木を得度させました。木を得度するというのはとても奇妙な考えに思われます。それはどういうことなのでしょう？日本の伝統では法衣を着るときに興味深い組み合わせで、つまり日本の着物、その上に儒教の学者の黒い衣、そして一番上にインドのお袈裟をつけるという着方をします。私たちはこういう三重の、興味深い文化的次元を持っていますが、タイや東南アジアでは僧侶はサフラン色の法衣を身につけます。その色の法衣、そういう布が仏教僧侶であることを意味していることはその地域の人なら誰でも知っていることです。私たちに「殺さない」という戒律があります。東南アジアでは僧侶を殺すことはとりわけ重大な犯罪行為だとされています。ですから、彼らは一片のサフラン色の布をもって大きな森の中に入り、伐採という点からみてたいへん戦略上重要な位置にある一番大きな木を選んで、それらの木のまわりにそのサフラン色の布を巻きつけるのです。木を伐採している会社は日本の企業ですし、マネージャーや現地のマネージャーは日本人でしたが、実際に伐採するのはその地域のタイ人でした。彼らが仏教僧侶の法衣が巻きつけられた木、つまり僧侶があたかもそれらの木を僧侶として得度するための儀式をおこない、その標として周りに法衣をつけた木を目にすると、彼らの心のどこかにもうそれ以上木を切り続けることができないような気持ちが起きてきたのです。彼らはみんなストライキに入りました。その出来事は、その地域の環境保護主義者たちを動かして日本の企業と交渉をさせ、世界のその場所では（環境を破壊しないで資源開発が）継続できる方法で伐採をおこなうようにさせるほどでした。これは、環境を守るということが現代人として良いことだというだけでなく、仏教的な価値でもあるということを地域の中で決断した人々の小さいけれど

も具体的な実例なのです。道元禅師が「山や河が法を説く」と言うとき、それは単に比喩的な言い方をしているのではありません。道元禅師のような中世期の日本の人たち、そして修験道に関わっている人たちは歩きます。『正法眼蔵』の中に『山水経』という題のついた素晴らしい巻があるのをご存知でしょう。私は、その巻を比喩的に解釈するだけではなく、つまり色と空の比喩として解釈するだけではなく、それとは別な様々なレベルの解釈を施すことができると思います。道元禅師はそれらの山を歩き、滝を見たのですが、それらの山や河のなかには文字通りの意味で法を説いているものがあつたのでしょうか。現代人として私たちはそういう考え方はまずしません。それは自然が何かのメッセージを体現していることを比喩的にいったものだと思われがちです。しかし、道元禅師は滝がお経を唱え、84,000巻の経典を唱えているところを目の当たりにしたのです。これは彼がそう書いているのです。ですから、仏教徒としては、単に企業の貪欲さの故に、また単に発展という考えの故に自然環境の破壊を許さないというだけではなく、法を説いているからこそ山や河を守る必要があるのです。これは一つの実例に過ぎません。

私が現在住んでいる地域で、サンフランシスコ禅センター系列の曹洞宗の仲間たちはたいへん興味深いことをおこなってきました。それはグリーンガルチファーム禅センターです。サンフランシスコのベイエリアにはシティセンターとタサハラ修行道場、そしてこのグリーンガルチファームがあります。それは、コミュニティとしてのサンガが計画的な方法で何かに専念することに関する良い実例だと思います。私達のお寺でもそういうことができるはずですが、もっと環境に対して負担をかけずに生きる方法を見出すことができるはずですが、日本でも、ソーラーパネルを屋根に取り付けている多くの曹洞宗の寺院を私は知っています。仙台のあるお寺、たいへん大きなお寺なのですが、お盆の時期に人々がお参りにやってきてたくさんの花を置いていきます。毎年、それらの花を捨ててしまわなければなりません。大きなお寺ですからその量は膨大なものになります。そこで、住職はお盆のときだけでなく、一年を通じて堆肥を作るプログラムを始めたのです。そこでは地域の中学生や農民が堆肥作りがどのように有効か、有機農業がどのようにおこなわれるかなどを学ぶことができます。そういうことがもうすでに日本や米国で起こりつつあるのです。グリーンガルチファームはサンガの

活動の素晴らしい実例です。それは「こういう環境問題を、単なるプロジェクトとしてだけでなく、仏教の修行の一部として真剣に取り上げようではないか」ということです。ここでは人々は他のみんながやっている同じスケジュールに従います。つまり、朝起きて朝課をおこない、夕方には坐禅などをおこないます。しかし日中には、常住者たちは農業に精を出すのです。有機農業を実践するのでこれはたいへん興味深い考えだと、私は思います。彼らは自分たちの暮らしている土地について学び、そこで自分たちが育てた食べ物を自分たちで食べるのです。また、面白いことに、彼らは野菜を育て有機農法の原理を理解し、その土地の生態や流域について考える方法を見つけました。そして、それを仏道という車輪のスポークの一本である「正命（正しい生業）」へと変換していったのです。

仏教には四聖諦と八正道という教えがあり、八正道の一つが「正命」です。どのように生計をたてて暮らしていけばいいのでしょうか？この上なく興味深く示唆深い方法で生きる糧をどのように得るかを考えていけばいいのでしょうか？彼らは生産物を収穫し、それをサンフランシスコのさまざまな施設、特に「グリーンズ」というサンフランシスコ禅センターのメンバーが創設した有名なレストランなどで販売しました。生産物を販売する方法や、殺虫剤を使わないといった、大地にやさしい暮らし方を見つけることによって、彼らは、苦しみを引き起こすのではなく、苦しみを軽減するものを作る方法を見出したのです。人々は有機的に栽培されたものを手に入れることで利益を得ますし、彼らは収入の源を持つことで利益を得ます。そこには仏教で言う「大きな円環のように、自が他を益し、他が自を益する」という考えがあります。それは、サンガにおいて倫理的な行動をとっていく上で、大いに助けとなる仏教の重要概念だと思います。

さて、ではこの考え方を経済に当てはめてみましょう。会社をどうやって運営していくか？現代西洋資本主義におけるほとんどの会社は、どうやって最終損益を黒字にするか？どうやって第四半期の数字をアップさせるか？ということしか考えていません。他者のことを考慮しないで、どうやって自分が利益をあげるかということだけが問題なのです。実際のところ、他者は競争相手なのです。では、経済に関する仏教的考え方とはどのようなものなのでしょうか？まず、私たちはお互いに結びついた網の目のような中で生きているという

理解があります。ですから、ビジネスや経済活動体としていかに振る舞うかが自らを超えて大きな影響を他にも及ぼすということ、川を汚染することで何かを生産するならそれを考慮に入れなければならないこと、利益をあげなければならないこともよくわかっています。おそらく納税者が最後にはなんらかの方法で支払わなければならない大型基金のようなものかもしれません。あるいは、魚が死んでそれに依存している猟師や漁業が影響を受けます。経済的活動について考える場合には、それが他にどのような影響を及ぼすかというより大きな背景で考えること、そしてそれは会社内部の経営手法から、雇用者をどう扱うか、親切さと苦しみの相互的軽減という仏教的考えを用いるか、それとも貪欲さと自己中心的な方法で自分のことしか考えないか、といったあらゆることに関わってきます。苦しみを軽減するという点に関して仏教は大きく言って二つの方法を提供しています。自分ではどうしようもないことがあります。例えば、死ぬということはどうしようもありません。病気になることもそうです。それらは人生の一部になっているからです。しかし、その苦しみの鎖を切ることのできる二つの部分があるのです。その一つは無明です。それは仏陀の部分、つまりものごとの見方に関わる部分です。それを変えることができるなら、つまり無明の立場から智慧が浸透した立場に変えることができるなら、苦しみを減らすことができます。もう一つの大きな部分は貪欲さです。道元禪師は、智慧を増し貪欲さを減らすことについて語っています。それが彼のもう一つの教えです。つまり、仏教的な生活を送る最善の方法は無明を手放し、智慧を増し貪欲さを減らすという考えです。無明や貪欲さと入れ替わるものは何でしょうか。それは慈悲です。貪欲さとは自己中心的です。貪欲さが「これをどうすれば私に利益をもたらすことができるか？」ということに関わるものであるとするなら、慈悲とは「これをどうすればわたしと他者に利益をもたらすことができるか？」ということに関わるものです。それはキリスト教と対照的に、単なる利他主義ではありません。カトリックの慈善は偉大なことです。たとえば、ホームレスのためのシェルターとかそういったことです。しかし、その態度には「あのかわいそうなホームレスの人たち」といったものがあります。それはよく見られる態度です。それは誤解を招きかねません。しかし、仏陀が説いているのはそれとは別のことです。仏陀は「私はあの人たちよりはましだ。私は道徳的に、あるいは経済的にもっとましだ...」と考えるべきだなどとは言いません。人々を助けるのは彼らが苦しんでい

るからであり、私たちも彼らとともに苦しんでいるからなのです。それが「コンパッション（慈悲）」という英語の意味するところなのです。コンパッションという語の語源は「コン」と「パッショ」から成り立っています。「パッショ」とは「苦しみ」であり「コン」は「～といっしょに」という意味です。ですから「コンパッション」を持つ、と言うことは「他者といっしょに苦しむ」ということなのです。ですから、偉そうな態度で自分たちはましだからかわいそうな人々を助けてやるということではないのです。人々を助けるのはそれが私たちの生き方だからなのです。彼らは私たちであり、私たちは彼らだからこそ人々を助けるのです。

結論を言えば、仏教は私たちに次の三つの大きなものを与えてくれます。考え（教え）、つまり仏陀、自由へと私たちを導く世界の見方を与えます。法、その考え（教え）をどのように実践するか、その考え（教え）をどのようにして具現化するか、それらの教えをどう生活の中に活かすか、どのようにして内的生活、社会的生活、家庭生活、より広い政治的、経済的、そして環境的生活の面においてそれらの教えを生かしていくか、についてのさまざまな教えを与えてくれます。そして、それを私たちは個人としてやるものではありません。アメリカ仏教においては時として、「坐蒲の上に乗って坐禅したらそれで充分」というような考えを持つことがありますが、お寺においてはそういうことではないとみなさんはよくご存知でしょう。お互いに共同体を作りながら仏教を実践しています。それがサンガです。

曹洞宗僧侶のクワング寂照師は、かつてサンガについてのすばらしいイメージを紹介しました。彼が日本へ行った時に鈴木老師の息子さんのお寺を訪ねました。そこで、食事のために小さな芽があちこちから出ているジャガイモを洗うように頼まれました。彼は一生懸命に気をつけて一個ずつ洗おうとしました。そこに鈴木老師の息子さんがやって来てこう言いました。「違う、違う」、そして彼はバケツを取ってジャガイモをみんなその中に入れ、ジャガイモ同士を互いににごしごすり合わせ始めました。そうやってジャガイモの芽や汚れをきれいになくしたのです。さて、これこそがサンガなのです。地域やお寺で私たちはお互いに擦り合うのです。それを正しくやるならそれは私たちに力をつけてくれます。私たちに力と共同体を与えてくれる、この世で一人ではないということ、それがサンガなのです。一人孤立して仏教を実践

しているのではありません。共同体の一部として、お寺の生活の一部として実践しているのです。それはこの曹洞宗の集まりの素晴らしいことの一つだと思うのです。あなたがたはこの共同体を作りあげているれっきとしたメンバーなのです。

私が僧侶になったとき、師僧の小笠原隆元老師がこう言いました。「ダンカン、僧侶であるということはどういうことか知っているかね？」私はわかりませんでした。彼は私を試したかったのでしょうか、さらにこう言いました。「僧侶であるということはどういうことか知っているかね？」私は「いいえ。教えて下さい」と答えました。すると老師は「僧侶になったら、それは共同体、つまりサンガに奉仕するために自分を提供するということだ。それは真夜中でも君を訪ねてもいいということだ。君は『来てはいけない』と言うことができないんだ。僧侶として君はいつでも人々を歓迎しなくてはならない。法衣を身につけた以上は、それは『何かお手伝いすることはありますか？』ということなんだ。だから法衣を着たら、自分や自分の時間、自分の空間を手放して『何かお手伝いすることはありますか？』と言うんだよ」と言いました。私は「それでも僧侶になりたいです」と言いました。だから、僧侶は人々がそこにいなければ何もできません。あなたたちみんながそこにいるということは、僧侶を助けていること、ダルマの役に立っていることなのです。あなたたちがそこにいるということは、ジャガイモがお互いに擦れ合ってエネルギーを生み出し、共同体とお互いや僧侶たちがその方向に向かって進むための力とを生み出しているようなものなのです。

いつでも完全であるというわけではありません。おわかりですね。私たちはしばしば道からそれてしまいます。でも、私たちはいつでも道に戻れるということ、例えば坐禅をいっしょに行くと、サンガが思い出させてくれます。警策を持った僧侶が回っています。そして「警策を持った僧侶が回って来たな。自分の姿勢はこんなふうに曲がっていたな、とか心がまったく別のところに飛んでいたな」と気がつくのです。それは私たちが道に再び戻ってくる力を与えてくれます。さて、私は次のような考えを述べて話を終わりたいと思います。

もし私たちがこうやっていっしょに修行するなら、仏・法・僧を体現するなら、北アメリカに何か新しいものを創造

できるだろうという考えです。これは仏陀が予言したことを私たちが実現するまたとない機会です。仏陀は仏教がいつも東へ向かって進むと予言しています。彼がこの集まりのことを考えていたのか、それは定かではありませんが、仏法が伝播し、ありえそうな場所へと広がるということとそれとなくほのめかしているような気がします。仏教がアメリカの宗教的風景の一部にまでというのはまずありそうにないことです。しかし、私たちがここにこうしているということ、皆さんがお寺でおこなっていること、それはまさしく仏陀のやったことをおこなっているのです。それは、まさしく「仏教東漸」という予言を実現し遂行していることなのです。あなたたちのおこなっている活動に感謝いたします。あなたたちの努力に感謝いたします。今日の午後、様々なサンガがいっしょになるとき、みなさんが素晴らしいときを過ごされますように。

ありがとうございました。

2008年宗立専門僧堂安居について 安居 修行を新たに

ストリム・玄心

フランス・シャトレ道場（藤井博道徒弟）

日常生活の中で禅を修行することと、禅を修行するために日常生活から離れることは別のことである。日常生活のなかにおいて禅の教えを学ぶことと、禅の光のなかにおいて日常生活を学ぶことも別のことである。安居とは自分の修行を新たにすることであり、修行の根源へと飛び込むようなものである。

曹洞宗宗務庁が開催したヨーロッパで最初の安居は、2007年の秋に開かれ、11名のヨーロッパ人の比丘、比丘尼が集結した。彼らはみな長年にわたって禅を修行してきた者たちであった。その11名中私を含む3名は、幸運にも2008年秋に開かれた2度目の安居にも参加することができた。さらに私は、私の師僧が住む日本の總持寺祖院での安居を経験する機会にも恵まれた。日本での安居とヨーロッパでの安居の違い、ヨーロッパで二度おこなわれた安居の違い

(二度目の安居では参加者の数が倍に増え、ヨーロッパ以外の国からの参加者もいた)をあれこれと挙げることができるだろう。文化的な違い、言語上の障害、時には私たちが受ける教えや参加者の期待の間に食い違いがあったりしたこともあった。

いずれにせよ、安居は誰にとっても、常に自分の習慣と縁を切ることである。自分の家にいるのではなく、仏祖の家において、彼らが時と国境を越えて確立した規則に従っているのである。たとえ私たちが禅の修行を長くやってきたとしても、たとえ僧としてほとんどの時間をお寺で暮らしているとしても、いったん僧堂に入れば、再び初心者に戻るのである。坐り方、食べ方を再び学ばなければならないし、新しい教えや作法を学ばなければならない。自分が正しいと思っていることをいったん忘れなければならないし、ときには最高の心的態度だと考えていることすら忘れなければならない。

お寺での生活において、安居は一種の新しい始まりであり、ときには新しい出発の機会だとさえいえる。修行僧と古参僧とが出会わなければならない。修行僧は新しい進退、新しいお経の唱え方を学ばなければならない。古参僧は昨年、あるいはこれまでの進退を思い出さなければならない。法式進退において、すっかり忘れていたり、あるいは自分にとってあまりにも自然なものとなり身体では覚えていても、心(頭)がそれを説明できなくなっていたりと、その都度、試行錯誤する光景が随所に見られ、それは頻繁にあった。

禅道尼苑での前回の安居中、事務局スタッフ、古参僧、修行僧を交え、しばしば一緒に様々なことをどのようにおこなうか、さらには何をすべきか、何をすべきでないかといったことについて議論を重ねた。様々な状況に対処しなくてはならず(例えば参加者の人数や年齢)、また新鮮で活気ある雰囲気を作り出さなければならなかったためである。

安居とはまた新しい関係のことも意味している。それは、新しい修行する仲間と出会うというだけでなく、お互いに支え合わなければならないということ。また、様々な指導者(講師)たちから教えを受ける機会があるというだけでなく、3ヶ月の間、来る日も来る日も24時間ずっと安居という同じ「船」の中でいっしょに暮らすということでもあるのだ。そこでは、前から知っている人でも新しい顔を見せる。法友

に出会い、お互いに親密になり友好的な関係のネットワークを築くということは、安居で得る利益のほんの一部に過ぎない。

もちろん、他人といっしょに毎日を過ごすことは、いつも穏やかな日ばかりではない。人々の間に調和を見出すには時間がかかる。この調和はいつも不安定である。いかに他者と共に生活するか、感情の爆発をいかに抑えるか、いかにして否定的な気分には落ち込まないようにするか、何が起ころうとも全生活をいかにして修行へと変容させるかを私たちは見出さなくてはならない。

お寺において調和を作り出すうえで法式は特別な重要性を帯びている。お経を読んでいるときに声がうまくそろうには、また線香を持つ侍者の動きと導師の動きとがうまく同調するには時間が必要である。法式中の行動は私たちの心の状態がどうであるか、どのくらい深く現在の瞬間に関与しているか、他者にどのくらい注意を注いでいるか、を映す鏡のようなものである。何度か、この安居中の雰囲気は来山者たちによって乱されたことがあった。この乱れがもっともはっきり現れたのは、法要の最中だった。お経を読むときの声がうまくそろわないのだ。来山者たちが去ると、波が通り過ぎて海に静寂が再びもどるように、また調和が戻ってきた。来山者たちがもう少し長く留まっていたなら、彼らも私たちといっしょに法式を学び、彼らとも調和を見出していただろう。

習儀の時間は貴重な時間でもあった。法式を学ぶというのは誰にとっても自分自身の抑制、間違いを犯して他者の邪魔になるという恐れ、新しいことを学ぶ困難、ときにはやっていることの無意味さ、などと直面するということである。結局のところ、すべての人がゲームに参加し、自分の限界を乗り越えようと努め、自分の犯した過ちや他者の過ちから学ぶことである。

相互に関わりあいながら、私たち一人一人が法輪を転じ、自然に伝わっていく安居の喜びを作り出していることを理解するまでは、私たちは極めて単純な安居生活をおこない、法輪が私たちを転じていく。だから、私はこの安居を実現してくれた人々に深く感謝するとともに、このような修行が、祖師の教えを学ぶことによって自分の修行を新たにしなければならぬと思っている人々のあらゆる場所に根付くことを心から願っている。

他者を含む

クインテロ・伝照

コロンビア・大心寺（奥村正博徒弟）

コロンビアの地に真摯な禅修行を打ち立てるためには、曹洞宗の規則と伝統から学び、それに従わなければならないことは疑いの余地がないことである。僧侶の規則によれば、教師として補任されるためには、3ヶ月間の安居に、当人の学歴に応じて決められた回数参加しなければならないことになっている。これまでは、正式な修行をするためには日本の僧堂に入らなければならなかった。このことは、西洋人にとっては言語の問題などの理由から困難な努力であった。したがって、現在の西洋人指導者のなかには日本における修行をした後で教師資格を得た者もいることはいるが、その割合は（西洋における僧侶の人数や、お寺や禅センターの多様性を考えれば）きわめて少ないと言える。だから、日本ではなく西洋においてこのような修行（安居）をおこなう必要性が高まっていることは間違いない。ヨーロッパで2007年に第1回、2008年に第2回と安居が開催されたが、それへの参加者の数が増えていることから、そのことは明白である。

いずれにせよ、私が安居に参加したのは、教師資格を得ることに関心があったからだけではなく、伝統と日本人僧侶からできるかぎりのことを学び取りたいと願っていたからでもあった。さらに、私が学んだことを、コロンビアで私といっしょに修行している人たちに分かち合いたいと強く思っていたからでもある。何年も前に、ボゴタに修行のための禅センターを開こうと思った時から、私が一番やりたかったことは、私たちはすべて同じ一つの生命の網の一部であるという意識、私たちがおこなうことはなんでもあれ他のすべてに影響を及ぼすという意識を、他の人々の中に目覚めさせたいということだった。さらに、たとえどれほど自分自身を仏道に捧げたとしても、自分の修行の中に他の人々を含んでいないならば、それは無意味であるということ私は確信している。だから、北アメリカ国際布教総監部からこのヨーロッパでの安居への招待を受け取ったとき、それに参加することが私個人の道にとって重要であるだけではなく、コロンビアで私たちがおこなっている布教活動にとっても必須のことであることはわかっていた。そこで教えられることは、より平和で有

益な社会を作り上げることに役立つに違いない。それは私たちの国にとってこの上なく必要なことなのである。安居に参加するために、私は私のサンガや友人たちから多大な援助を受けた。私は彼らに深く感謝している。

安居が開催されたフランスの禅道尼苑に戻ることは私にはたいへん感慨深いことであった。そこは21年前、私が初めて得度を受けた場所であったからだ。私をまず驚かせたことは、安居者たちの平均年齢が40歳を超えていたこと、そして彼らは皆、長年修行をしてきた人たちであったことである。それにもかかわらず、3ヶ月の間、日本の曹洞宗の軌範に従った修行を学び実践するために私たちは一堂に集ったのである。最初の日から、安居者全員が初心に戻り、調和のとれた修行を進めるために最善を尽くした。私は、そこで修行した僧侶たち一人一人についてすばらしい思い出をもっているし、彼ら一人一人から多くのことを学んだ。

そこでは、2つの指示をしばしば耳にした。それは「間違いを犯すことを恐れてはいけない」、「間違いをしても大丈夫」である。横山泰賢監事は、慈愛にあふれる叱責によって、すべての間違いは過去のものであるということを確認させてくれた。過去にこだわらず、現実に存在している責任に目覚めていること（それは誤りをしないということである）に努めることが非常に重要なのである。日本の曹洞宗寺院での日常の差定にしたがった修行をするためにそこにいるわけだが、本当の修行はそのような日々の活動を通して「自己をなろう」ことであった。それをするためには、「自己をわすれる」、つまり自分が知っていると思っていることを忘れ、自分流のものごとのやり方を忘れ、自分の見解や個人的関心を忘れ、すべての修行を修行者の共同体のためにおこなわなければならない。「万法に証せらるる」とは、私にとっては、道元禅師の『現成公案』にある教えを実現することだった。

この安居中に得たもっとも貴重な経験の一つは、役寮を始め、事務局員の一人一人が示した実例と私たちといっしょに修行するために日本からやってきた僧侶たちの有益性（いつでも援助してくれる状態にいること）であった。私は、彼らの献身的苦勞に心から感謝するとともに、すべての人の名を挙げてお礼を述べることができないことを申し訳なく思っている。しかし、堂長老師を務められた今村老師と監事を務められた横山泰賢師は、とりわけ私に深い印象を残した。今村

老師は、物静かな修行、ものごとをおこなう繊細なやりかた、そしてその存在感は私にとっては永遠のお手本となった。横山師は大変熱心に深い情熱を持って、そして親切に私たちを導き教えてくれた。彼は目と耳を大きく開いて、つねに私たちのそばにいて、必要な時には最善を尽くして私たちをいつでも手助けできる状態でいてくれた。彼ら2人には心から尊敬の念と感謝を捧げたい。

個人的に言えば、安居での経験はたいへん充実したものであった。学んだことを実践すること、間違いを犯して日々のお寺の生活のリズムを乱さないようにすることはとてもやりがいのあることだった。安居の間、作務をする時間があったが、私が一番楽しんだのは森の中での作務、それはすばらしい風景の中で木材を運ぶことだった。講義に関しては、多くのことを学ぶことができたし、様々な講師たちによってなされた講義は意義深いものであった。その中の1人は、私の師僧である奥村正博老師であり、『典座教訓』についての素晴らしい講義をおこなってくれた。安居の差定は、学習、作務、坐禅から成り立っており、それらがよく調和されていたと思う。

安居の組織も、その間に提供された資料も同様に申し分のないものであった。こうした特性を備えた安居をおこなうためには、多くの資金、エネルギー、人員が要求される。日本の境界を越えて修行をヨーロッパにもたらし、西洋の僧侶たちが修行を深め、教師資格を得るための過程を継続し、伝統を直接伝えることができるようにするために、曹洞宗は多大な努力を払ったことは間違いないことである。禅が成熟し曹洞宗の伝統が伝わってくるまでには何世紀もの時間が経過したことを私たちは承知している。禅がコロンビアに伝わるまでにアメリカやヨーロッパですでに現地の人々によって何十年も修行されてきているが、安居者の母国のいずれにおいても、その歴史は日本のそれに比べれば、まだきわめて浅いといわなければならない。それらの新しい土壌に禅が深い根を張り、それ自身の表現をするまでにはまだ何年もの年月がかかるだろう。

自分自身の国でこの修行を発達させようとしている私たちにとって、日本の禅という源から与えられる滋養をたっぷり受け取らなくてはならない。また同時に私たちから、真摯で熱心な修行の若いエネルギーを日本に与えていかなければならない。だから私は、日本の曹洞宗が世界共通の修行がお

こなわれることを本当に望むなら、より多くの参加者がこの安居という修行に参加できるような努力を続けることが重要であると思っている。このような安居がもっと頻繁に開催されるようになるだけでなく、日本国外に恒常的な修行道場が設立されること、あるいはすでに海外に存在しているお寺を僧堂として認可することを私は強く望んでいる。

今日では、人類が三つの毒をもった心によって支配されていることがますます明らかになってきた。私の国がそのよい実例だ。そこでは暴力、社会的な不正義や貧困、差別、不平等がはびこっていて、したがって禅の修行を広めていくということが緊急の課題になっている。日本からだけではなく多くの国や地域から修行を広めて行くという使命を引き起こさなければならない。私たちの努力を、修行を通して世界に法灯を持たらすことだとするならば、ひとつの孤立した法灯はいろいろな場所から持たされた多くの法灯ほど明るい光を放たないということを知らなければならない。



正法眼蔵坐禅箴 自由訳

藤田一照

葉山磨博会主宰

南嶽が「打車即是、打牛即是」と言ったことも、「車を打つのがよいのか？、牛を打つのがよいのか？」とA or Bを尋ねているのではない。つまり、どちらが正しいかを選べと言っているのではない（坐禅に当てはめて言うなら、行と証をわけたうえでそのどちらかをとれ、という話なのではない）。そうではなく、「車を打つ」ということもあるし、「牛を打つ」ということもあるはずだ、と言っているのだ。「打車も即ち是、打牛も即ち是」ということだ。車を打つことと牛を打つことは、等しいのか？それとも等しくないのか？人が牛車に乗るといことは坐禅をするといことの例えとして出されているのであるから、<人・牛・車>を一体のものとして見るなら、車を打つことも、牛を打つことも等しく、人が牛車を打つ（＝行ずる）こと、すなわち坐禅の営みとして理解することができる。しかし同時に、打車は坐禅という行、打牛は作仏という証という違いもあることを見逃してはならない。強いて言うなら両者は不一不二、不即不離の関係にあるのだ。世間には牛車が進まない場合に、車を打つという法はない。凡夫の世界では車を打つという法はないけれども、ここでの南嶽の言葉のおかげで仏道には車を打つという法があることを知った。それがここでの参学の大切なポイント、眼のつけどころなのだ。しかしたとえ、仏道には車を打つという法があることを学得したといっても、それが牛を打つことに等しいと単純に決めてかかってはならない。その点については詳細に究明していくべきである。打車すなわち坐禅の道理をよくよく究めるべきだ。

また、牛車が進まないときに牛を打つという法は普通に世間にあることであるけれども、仏道における牛を打つことについて、世間一般の牛のたたき方に準じてそれを理解したと思ひ込まずに、さらに追及し究明していかなければならない。すなわち、仏道において牛とはなにか、打つとはどのようなことなのかを参究するべきなのだ。水牯牛（南泉普願やい山靈祐の公案に出てくる牛）を打牛するのか、鉄牛（善月光遠や風穴延沼の考案に出てくる牛）を打牛するのか、泥牛（龍山和尚の言葉に出てくる牛）を打牛するのか（以上、公案に出てくるさまざまな牛が列挙されているが、これらは坐

禅における作仏のありようについて、牛のメタファーが用いられた代表的な表現を挙げたもの）、鞭で打つのか、尽十方界をもって打つのか（尽十方界自己を挙げての坐禅をする）、尽心をもって打つのか（一心一切法 一切法一心としての心を尽くしての坐禅をする）、勢いよく髓に達するまで打つのか（骨髓に徹する坐禅をするということ）、拳をもって打つのか、と問うていくのだ。さらには、拳が拳を打つということがあるべきだし、牛が牛を打つということもあるべきだ。打つというときに普通は「打つもの」と「打たれるもの」という二つの別々な実体を想定するが、ここではそのような二元論が否定される。「それ」が「それ」を打つという表現は、坐禅においては打つ拳と打たれる牛とは一つであり、全体ただ拳ばかり、あるいは全体ただ牛ばかりであることを指している。

これに対して馬祖は返事をしなかった。この無対は返事に窮して答えられなかったということではない。「坐禅のほかには作仏はない」、ということ言語にわたらず、無対という行為で完全に言い抜いていることをわれわれは正しく読み取らなければならない。南嶽の「打車即是、打牛即是」という言葉の趣旨をしっかりと受け止めた上での馬祖の無対なのであるから、馬祖が無言であったことの真意を空しくとらえそこなうようなことをしてはならない。仏教、特に禅の世界における問答では無対＝沈黙のもつ意味を簡単に見過ごしてはいけないのだ。彼の無対は「磚を捨てて珠玉を引き取る（趙州の言葉 文字通りに読めば取捨するような意味になるが、ここでは磨博作鏡と同様に磚を捨てることと珠玉を引き取ることが等同であることを言う）」、「頭をめぐらして面を換える（同じものを同じものに取り替える、そのものを転じてそのものにする、仏性はどう転換しても仏性であることを言う）」という内容をもった無対である。そのような貴重な無対をむりやりひったくようにして、安物買いしてはならない。

南嶽がまた示して、このように言った。「おまえが坐禅を学ぶということは、とりもなおさず坐仏を学ぶということだ」。この言葉を参究する（言葉や理屈を覚えることではなく自分の身をもって実際に坐禅し、坐禅が坐仏であることを身をもってうなずき徹底的に体得する）ことによって、歴代祖師がたの教えの要としての機用（＝坐禅）をはつきりとわきまえ、飲みこまなければならない。ここで言われている「学坐

禅」そのものがいったいどのようなことであるのかは全身心を挙げて坐禅をしているその当人には絶対に覚知することもできず理解することもできないが、この南嶽の言葉によって、それが「学坐仏」であることを知ることができた。正しい仏法の系統を受け継いでいる者でなければ、どうして学坐禅が学坐仏であるとはっきり言っているのけることができるだろうか。次のようなことを本当に知らなければならない。すなわち、仏道に入ったばかりのときにおこなう坐禅は最初の坐禅であり、最初の坐禅は最初の坐仏であるのだから、坐禅には初心も後心もまったく差がないのだ、ということ。

坐禅について語る言葉として「若し坐禅を学せば、禅は坐臥に非ず」ということが言われている。道元禅師の文章では「若」は「もし If」と読まないで「すでに」と読むこと、「非」は単なる否定ではなく「超越」の意味として理解しなければならない場合が多いことは前に述べた。ここでの用法もそれに当たる。この一句が言わんとしていることは「坐禅はどこまでも坐禅であって、日常生活におけるさまざまな生活姿勢のひとつとしての坐ではない」ということだ。すでに坐禅をしている以上、それは日常の相対的な姿勢としての坐を超越しているから、それを単に坐っていると言うべきではなく「坐禅」と言うべきなのだ。そういう意味合いにおいて、坐禅は日常の坐と同列に論じられるべきものではない。臥についても同じことが言える。臥も臥仏であるときには臥禅というべきで日常生活の臥と同列に論じるべきではない。つまり、禅というときには坐禅に限らず、すべての活動に「非」という質が備わっているのだ。

だからこの言葉が言っているのは「坐禅は坐禅であって坐臥でありながら坐臥を超越・解脱・脱落している」ということだ。このような洞察を純粹に相伝ししっかりと身につけたのちには、無限に展開していく坐臥(=坐禅)が本来の自己そのものなのである。そのときには坐臥と自己とが親密であるとか疎遠であるとかといった相対的な分け隔てを見つけようとしたり、迷いとか悟りの区別を論じたりする必要はさらさらない。ましてや智慧によって煩惱を断じようとする人間的な営みなど入り込む余地は無い。断ずるべき対象そのものがないからだ。

南嶽が言った。「若し坐仏を学せば、仏は非定相なり」(ここでも若は「すでに」、非は「超越」の意に解するべきであ

って 通例のように「仏は定相にあらず」と否定形には読まない)

言われるべきことをキチンと言い取るということはまさにこのような見事な表現のことを言うのだ。この言葉が言わんとしているのは「坐禅を学しているときそれは坐仏が学しているのであり、その仏は非定相という仏の相をしている」ということだ。坐禅をしている仏は一つの仏、二つの仏とそのときそのときで個々いろいろなあり方をしているが、それはみな非定相(固定的に定まった形がないことをその形としている)を莊嚴(かざること)、すなわち実現しているからだ。いま「仏は非定相である」と表現したのは仏の相のありようを端的に言い表しているのだ。いかなる決めつけや制約からも自由で、融通無碍であるのが仏なのであるから、非定相の実現である坐禅が坐仏であることを回避することができないのは至極当然である。このようであるから、坐禅はある特定の形への限定なのではなく、自由無碍なる仏が具体的形として立ち現れた姿として理解されなければならない(横山祖道老師は「坐相降臨」と言った)。つまり坐禅は、仏(という)非定相の具体的現われ(莊嚴)なのであるから、「若学坐禅はとりもなおさず坐仏(坐禅を学せばそれがそのまま坐禅している仏にほかならない)」ということになる。「無住法(非定相と同類のことば 固定的な特定の場所に住することがないあり方)」においては、仏ではないといって取捨したり、仏であるといって取捨する余地はありえないのだ。そういった取捨が始めからぬけ落ちているからこそ坐仏なのである。

国際ニュース

北アメリカ曹洞禅会議および研修会

場所：カリフォルニア州ロサンゼルス 禅宗寺

日程：3月8、9日